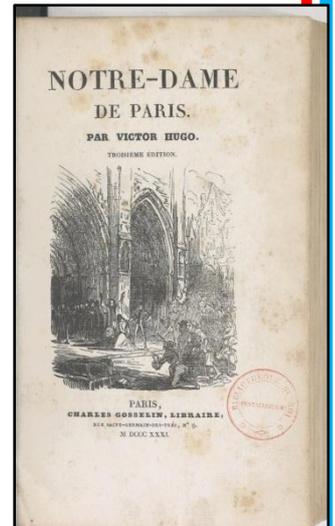


# ランス豆知識

その2. ランスに生まれ、パリに育ち。

**そ**れは、物語の中のふたり。

ロマン派の文豪として知られるヴィクトル・ユゴーの最初の小説「ノートル＝ダム・ド・パリ」の中で、“作中話”として、ランスからパリ見物にやってきた「おのぼりさん」が語る「トウモロコシのパン種で焼いた菓子の話」。昔々、ランスの町で起こった悲しい「取り替え子」事件が、美しいジプシー・エスメラルダ、孤独な鐘つき男・カジモド、そのほか主要人物たちの劇的な運命につながる重要な伏線となって、物語を彩っています。



「ノートル＝ダム・ド・パリ」  
C. Gosselin (Paris)版, 1831  
フランス国立図書館蔵

ユゴーは1822年、20歳で発行した処女詩集「オードと雑詠集」で、国王ルイ16世の目にとまり庇護を受けることとなり、1825年6月にはランスでのシャルル10世の聖別(戴冠)式に招待され、祝詩を書きました。その時の体験が、ここに生かされたと言われています。



参考文献:

「ノートル＝ダム・ド・パリ」(ヴィクトル・ユゴー文学館5) 辻昶, 松下和則/訳 潮出版社, 2000

「ヴィクトル・ユゴーの生涯」 辻昶/著, 潮出版社, 1979

フランス国立図書館電子図書館『ガリカ』gallica.bnf.fr/  
ウィキメディアコモンズ「シャルル10世」の項目 ほか

ユゴーの出席した、シャルル10世のランス大聖堂での聖別式を描いた絵画(シャルトル美術館所蔵)

Detail de la peinture de François Gérard représentant le sacre de Charles X Reims, juin 1825